

私の授業は特別な工夫をしているわけではなく、植物が如何にすばらしいものであるか、また作物（植物）生理学という学問が如何に興味深いものであるかを、汗して話しているだけである。それが幸いにも学生諸君の評価を得たのなら、こちらの熱意を聞き手が感じ取ってくれたのだろう。年度ごとの聞き手の反応も少しずつ異なり、昨年度は特にこちらの目を見て話を聞いていた学生が多かったので、口が上手く滑ったためでもありそうだ。この授業は農学部生物資源科学科2年生（36名、必修）と他の学科の3年生と4年生（約40名、選択）を対象としている。作物生理学は、農学部の多岐にわたる植物学関連の学問を学ぶ際の大切な基礎を提供できる。またやる気のある学生諸君の興味を喚起して、自分の分野に所属してもらえれば、分野の研究の発展にもつながる。それらを肝に銘じてインパクトのある「理解してもらえぬ授業」を心がけている。

授業は板書を多用する。資料を多く用いると、後から見直すときにノートとの整合性がとれなくなるし、森の無駄遣いになる。そのため一回の授業でチョークを平均2本程使ってしまう。元来悪筆で、下手な字しか書けないが、字が読めないと言う批判はあまり聞かない。また所々で、補足として小さな資料を渡して、話に沿ってノートに貼ってもらっている。イラストレーターなどのグラフィックソフトで図を作り、縮小してプリントしたものを細かくカットしたものである。こうするとA4一枚で最大12枚程の図が作れ、印刷マージンの無駄も少なくなる。授業を毎回サボらずに受ければ、修了時にはノート2冊の作物生理学参考書が出来上がる。さらに居眠り防止もかねて、毎回その日に話したことを中心にして小テストを課している。採点に時間がかかっても、理解しているかどうかが直ちに判り、授業にフィードバックすることができる。授業後の質問はほとんど出ないが、小テストの解答用紙に何でも質問を書くように言うと、かなりの数が出てくる。学生諸君はシャイなのである。授業とは無関係の質問でも、できるだけ次回の冒頭で答えるようにしている。

近年は様々な情報伝達機器が授業でも使用されるようになってきた。これを突き詰めていけば、プログラムを組んで動画でバーチャルな教師を作り上げ、衛星放送で全国へ流せば、生身の教師は不要になるかもしれない。しかしこのようなやり方では、情報の一方的な提供はできても、それらの総合としての知恵を上手く伝えることはできないだろう。頭脳の処理能力には限りがあるし、集中力も長くは続かない。車から見た景色と歩きながら見た景色は全く異なるように、スローでかつまた緩急を付けた速度で流れ込む情報は理解し易いし、それらを有機的に総合した知恵を知ることできる。耳で聞き、眼で見、手で書く作業はこの程良いスピードを保証するし、また適宜つまらない雑学を披露することも聞き手の息抜きになるし、知恵の伝達にもなる。

効率優先主義の反動として、スローフードやスローライフがもてはやされてきているけれど、生身の人間と人間の情報伝達もスローな方が馴染むと思う。ローテクを駆使して大きな声で話しながら書き殴る授業はかなり疲れるし、準備にもある程度時間がかかる。授業のある日には講座（分野）の学生たちへの対応がどうしても無愛想になってしまうので、講座の学生たちは授業日にはあまり近寄ってこない。